

学生懸賞論文「女性学インスティテュート賞」  
最優秀賞論文の第一回掲載にあたって

丸 島 令 子

今は昔私が若かった頃に「女子大生亡国論」という論議があったことを記憶している。その論点は何だったか忘れてしまい、再度調べてみる気も起こらないが、当時最高学府と仰ぎ見られた高等教育への女性の大量参加は好奇と驚嘆の的であったようだ。そして今日、そうした風潮の影響をなにごともしなかったかのように、女子大生、女子学生はますます元気でキャンパスに、町に溢れている。

ところが今、大学や大学生に対して向けられる目や評価は様変わりしている。いわく、「無気力、無関心でなんの目的もなく群れている烏合の衆たる大学生」「知性などとっくの昔に捨て去った大学生」「教室では学生の私語で教師の声は打ち消される」「睡眠の場と化し仲間同志の無駄話でサロン化した図書館」等々である。こうした現代の大学の雰囲気は何によるものか明確にされ認識される必要があろう。このような現象に女子大生、女子学生も加担してこなかったとは言えない。だが今も昔も高質な高等教育を渴望し、知的刺激を求め続けさらに自ら何かを創造したい欲求にかられる若者も跡をたたない。水準以上のより良いものを、ライバルより抜んでて秀れたものを創造せんと情熱を注ぐ若者も大勢存在することも信じられる。

今年度より女性学インスティテュートにおける研究システムにそうした若者・学生の参加を奨励し、「学生懸賞論文」という型でまずはスタートした。喜ばしいことに直ちに5件の学生からの応募があり、所員の教員が中心となって論文審査のレフリーがつとめられ、最優秀賞論文一編と優秀賞論文一編が選ばれ、前者はここに掲載された。これが一つのきっかけとなって、大学が真理の探究、発見、創造の場であるという本来の役割と機能を今一度あらたに認識し、そこに集う者、集ったことのある者は常にしのぎを削ってそれを推進するために働くという意識が強化されればと切望される。

(女性学インスティテュートディレクター)

#### ＜学生懸賞論文「女性学インスティテュート賞」＞

神戸女学院大学女性学インスティテュートでは1999年度より学生懸賞論文制度を設けることになり、1999年7月5日付で第1回目の論文募集を実施した。[1999年度については締切は9月末日。]

賞の名称は「女性学インスティテュート賞」。本学学生（学部生・大学院生）及び前年度の本学卒業生・修了生が執筆した、女性学、ジェンダー・スタディーズに関連する領域の論文が対象となる。最優秀賞論文（1編）には5万円の賞金及び賞状、優秀賞論文（2編）には各2万円の賞金及び賞状が授与され、最優秀賞論文については当インスティテュート発行の『女性学評論』（年1回：3月発行）に全文が掲載される。

なお、第2回（2000年度）以降は論文の募集時期を早め、締切を例年7月末日頃とする予定である。詳細は本学図書館本館1Fにある当インスティテュートまで。